「ECOフェスタ」に参加して

「府内☆学生ＥＣＯフェスタ」（６月19日、府内五番街一帯）には、情報コミュニケーション学科を中心にした本学学生がスタッフとして多数参加した。写真も学生作品である。

最高の誕生日

6月19日。この日「ECOフェスタ」があり、私はダンスサークルとして、イベントに参加した。この日が初舞台である。それともう一つ、この日は私の誕生日だった。みんなの目線を浴びる中で踊る。きっと頭が真っ白になって上手く踊れないだろうと思っていたけど、それは違った。自分でもわかるぐらいの満面の笑みで楽しく踊れたのだ。最高の誕生日になったと心の底から思っている。

（1年・佐嶋綾香）

私の決意

7月23日、鶴崎で行われるSAEMON23というお祭りにスタッフとして参加する。ゴミを減らす目的でみなさんに少しでもecoの意識を持ってもらうために活動をする。ゴミ問題も地球に全く関係ないことではない。ほんの少し努力するだけで、生きられる動物がいるなら手を貸したい。どの生き物もなんでもない理由で死んではならないのだ。

（１年・稗田結菜）

次は湯布院映画祭

「ECOフェスタ」成功に向けて、どの学生も一生懸命に頑張っている姿を見て、すごく刺激をもらった。私は今回、観客側として参加したが、これから夏休みにかけて行われる七夕祭、湯布院映画祭では実行委員として参加するつもりだ。イベントの成功に向けて頑張っていこうと思う。

（１年・川上真央）

ヒマラヤの雪

地球にいる人間や動物、全ての植物の生活が本当に難しいなっています。私は自分の国ネパールも、このことについて考えなければならないと思います。国の北側にあるヒマラヤも問題の一つです。温暖化のせいで、ヒマラヤにある雪がどんどん溶けています。この状態がこのままになっていけば、その地域の人間とすべての動植物が大変になるとおもいます。

（1年・GYAWALI MANI）

何かを始めたい

世界では過酷な自然環境の中で、必死に生活をしている人間もいる。私たちはその存在を知りながら、何か行動を起こそうともしていない。今こそ、限りある自然を守るために、何か動き始めるべきではないだろうか。

（１年・藤原はるか）

ゾーン責任者の言葉

日本一小さな花火大会

担当者が決まってないから、と言う理由で「日本一小さな花火大会」の責任者を引き受けた。一つのイベントの責任者になるのは、初めてだった。「君のところが一番大変だ」と先生から言われた時、初めて事の重大さに気がついた。スタッフ募集で来てくれた1年生。イベントの打ち合わせで、私は何をして良いのか、正直わからなかった。指示することの難しさに直面した瞬間だった。夢に出てくるほど、46時中イベントの事が頭から離れなかった。曖昧な指示にもかかわらず、臨機応変に対応してくれたスタッフに、心から感謝している。皆の楽しそうな姿を見て、何とも言えない達成感で満たされた。

（２年・井上千嘉）

府内フォーク村「十三夜」

府内フォーク村「十三夜」での「映像・音楽ゾーン」を担当した。たくさんのお客さんに楽しんでもらうためは、どうしたらいいだろうか。時間帯やイベントの構成など検討する日々が続いた。当日はK-POPS、イタリア、スペインの講座や、プロによるフラメンコ、大分大学バンドコンサートを行い、「十三夜」は盛り上がりをみせた。スタッフは外でのチラシ配り、司会、設営など仕事をこなし、お客さんを呼び込み楽しませた。イベント終了後、スタッフ全員が達成感にあふれた。お互いに意見を出し合い、よりよい「十三夜」イベントを作ることができたと実感した。

（２年・森本絵美莉、佐藤明日美）

和太鼓クラブ演奏

ライフパル写真展

Kポップス講座

高橋先生のギターソロ

ジャグリングサークル

AED講習会

「府内探検隊」が行く！

大分市の中心部「府内」。懐かしさが感じられる地名だ。豊後国の国府が置かれ、大友宗麟の時代は、南蛮交易のメッカだった。府内城址もある。6月19日、府内町一帯で開かれる「府内☆学生ＥＣＯフェスタ」。まず街を知らなくては、と府内探検に繰り出した。（文は2年赤池すずか、写真は同・井上千嘉、山元泰幸）

朝10時、府内町のサンサン通り。自転車屋さんから口ひげの男性が姿を現した。探検隊の案内役・児玉憲明さん（49）だ。大分の「まち歩き名人」。一緒に歩き始めると、次々と声がかかる。

県庁や市役所が近いからなのだろうか。はんこ屋が多いことに気づいた。「安部印房」もその一つだ。2代目店長の安部嘉彦さん（47）。昔は安部さんのように、ものづくりの人材が府内には多かったという。しかし職人は減り、その年齢も高くなった。（中略）

「私が子供のころ、店の前の通りは馬車道だったんだよ」。田崎洋酒店の店主・田崎一彦さん（64）が懐かしそうに語る。終戦の年に生まれた田崎さんは、空襲で焼け野原になった大分市街地が、時代とともに変わっていく様子を見てきた。「すいぶん風景も変わった。ここ数年で老舗はバタバタとなくなった。学生がいると街が活気づくから、どんどん出てきてほしい」

児玉さん曰く。「府内町は博多の大名のような所だよ。府内5番街は『若松通り』と呼ばれ、若者に人気の街だった」。府内の商店街には老舗と新しい店舗が混在する。「そこが魅力だ」と私たちは思った。（中略）

正午。老舗トキハのサイレンが鳴る。市街地にしみついた音だ。「パルコ」は撤収しても「トキハ」は健在だ。府内には面白いものがたくさんある。探しに出かけてみてはいかがだろうか。＝毎日新聞大分版「キャンパスカフェ」3月号掲載。

ECOフェスタ群像

「府内☆学生ECOフェスタ」には学生だけでなく、大分市市職員、商店街幹部、本学教員など多くの人が協力した。フェスタ群像の中から紹介する。

「市民の輪を」

（写真：前列左）

大分市環境対策課主事：三ノ宮 耕介さん（32）

学生と行政、商店街が手を携えて実施したＥＣＯフェスタ。大分市の実務担当者が三ノ宮さんだ。「世界でいま、最も注目されている環境問題。その分野で仕事ができて、やりがいは大きい」と語る。学生たちとの初のコラボレーション企画。「地球温暖化について関心を持つ契機にしてほしい。学生やお年寄りを含めた市民の輪を広げたい」と語った。

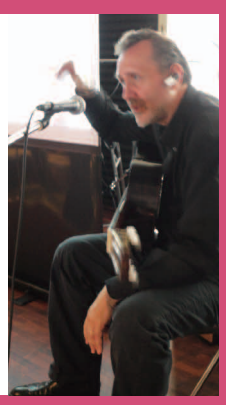
（1年・日高かずみ）

「イタリアの歌」

ヤンノッティ・ルイジさん（53）

芸短大イタリア語講師。19日、府内フォーク村「十三夜」でイタリアの歌を披露した。ナポリ出身。19年前にカトリック宣教師として来日。スローフード運動の発祥地イタリアのエコについて語り、ギター片手に「サンタルチア」「オー・ソレ・ミオ」など、日本でも馴染みのあるイタリア民謡を歌った。

（１年・青山ひかる）



「参加しなければ損」

（写真：後列右から2人目）

環境サークル長：国際文化学科2年 小田 麻衣子さん（19）

「大学でしか出来ないことをやりたい。自分からボランティアをやりたい」と思い、環境サークルに入った。地域のボランティア活動に参加したり、大学内に植樹をしたりするなどの活動をしている。長崎県出身。故郷は自然があふれる場所だった。「大分市が地域をあげて環境や自然への取り組みを行っていることに驚いた」という。昨年初めてキャンドルナイトに参加した。「最初は見て楽しむだけと思っていたけど、廃油でキャンドルを作ってみて、環境のことを考え始めた。卒業してもキャンドルナイトに参加したい、参加しなければ損だ」。

（1年・中川響）

「商店街の活性化のために」

府内五番街商店街振興組合理事長：牧通さん（59）

「五番街商店街のすばらしい街並みもぜひ見てほしい」商店街としても、街並み緑化や風力発電に取り組んできた。牧さんが経営するお茶の老舗「若竹園」は、エコバックの導入などにも努めている。「若い人たちでどんどん盛り上げてほしい。応援しますよ」

（1年・中村優伽）